

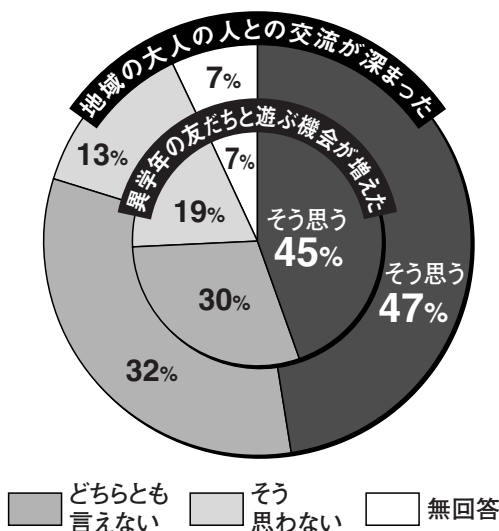
特集

次世代の新しいふれあい社会を担う子どもたちの「人間力」をいかに育てていくか——。さわやか福祉財団では、子どもの居場所づくりを2003年から全国で働きかけてきたが、折しも04年度からは国も学校の放課後を活用した居場所づくりを全国に推進し始めた。それから丸5年、その「放課後子ども教室」の現状を改めて取材し、子どもたちが持つ創造力を信じてその力をいかに引き出している事例をご紹介します。(取材・文/小澤 浩)

放課後子ども教室の効果

「放課後子どもプラン実施状況調査」資料より

■教室に参加している子どもの回答(回答数3312)



*「放課後子どもプラン実施状況調査」は、2007年12月1日現在の取り組みや実施に当たり課題等の把握について文部科学省と厚生労働省が合同に調査。

子どもが自由 に遊べる場所とは？ 「放課後子ども教室」 に求めるもの

子どもの居場所づくりは 子ども自らの創造力が重要な鍵

今回紹介する3事例は、さわやか福祉財団が重視している「子どもたちの自主性に任せて思いっきり遊ばせること」「大人はできる限り陰での支えとなり、子どもにもともと備わっている創造性を子ども自らが解放していくことを支援する」という姿勢を取っている。

この取材で会った現場のコーディネーターの皆さんが一樣に主張すること、それは結局は子どももの成長には時間がかかるということであった。

その良い例が、取材先の1つ、東京都杉並区立杉並第一小学校の放課後子ども教室「すぎっ子くらぶ」について思い出を話してくれた同小の卒業生で、都立高校に通う田崎龍里君（高一）の言葉だ。彼は「ぼくは地域のおかげで大きくなったんです。周りの助けがあつて今の自分がある。それとこれからも助けてもらえたら（笑）と思います」。さらに「大人になったら何がで

きるかわからないですが、時間のある限り地域に恩返しをしたいんです」と語ってくれた。

他の2教室でも、卒業生たちが自分の空いた時間に手伝いにやって来て後輩たちの面倒を見ている。地域の年下の子の面倒を見ることが自然に受け止めて行っているのである。

さてここで放課後子ども教室の現況について簡単に触れておきたい。

2004年度から06年度までの3年間は、国（文部科学省）主導の委託事業である「地域子ども教室推進事業」が、安全で安心して活動できる子どもたちの活動拠点づくりとして行われた。これをベースに、07年度からは全国の市町村が主体的に取り組む補助事業として、「放課後子ども教室推進事業」が行われることになった。

近年の状況は、07年度が総事業費約69・6億円、実施箇所4299（小学校にて）、市町村数851。今年09年度は総事業費約134・7億円、実施箇所6240（小学校にて）、市町村数1065へと広がりを見せている。しかしながら1教室当たりの年

間平均開催日数は、07年度117・7日から、今年度は121・6日の伸びに留まっている（今回取材した3教室はいずれも平均開催日数が年200日以上）。また気になるところでは07年度にゼロであった「『学習』実施教室数」が、09年度には4685箇所（子ども教室全体の53・7%）へ急激に増加したことがある。

今回取材した放課後子ども教室は、前記の東京都杉並区立杉並第一小学校の「すぎっ子くらぶ」、長野県小布施町立栗ガ丘小学校で行われている「小布施子ども教室」、埼玉県所沢市の放課後支援事業「ほうかごところ」（現在7校実施）のうち一番初めに取り組んだ所沢小学校の3事例である。

さらにこの3教室は、今年3月に東京で開催された文部科学省の放課後子ども教室全国研究大会において、第1回放課後子ども教室推進表彰教室として表彰されている。ちなみに、この大会で初日の基調講演を務めたのが理事長堀田力であった。後の大会の報告書によればこの講演は大会のアンケート項目「参考にしたい・取り入れたい取り組み」のトップ

（32・2%）であった
では最初の事例をご紹介します。

昔どこにでもあった 路地裏遊びを復活させたい

東京都杉並区立杉並第一小学校

「ちびっこくらぶ」

東京のJR中央線・阿佐ヶ谷駅北口を出て1分もかからないところに杉並第一小学校はある。駅のロータリーに面しているといってもおかしくない。校門を入り警備員さんに用件を伝えると、学校教育コーディネ



どう遊ぶかみんなでお話していく

1ターの伴野博美さんが迎えてくれた。伴野さんは、杉並第一小学校でのさまざまな活動が新聞でも取り上げられるなど、地域での精力的な活動で有名だ。

すぎっ子くらぶは、04年度から実施され、現在登録者174名、1日の参加者は90名前後である。伴野さんがすぎっ子くらぶをやるうと思っただけの1つが、当時の子どもたちの遊びのあり方であった。それはある家庭では「家に呼ぶ友達は3人まで」と母親が決めたり、公園であれば、好きな子同士でしか遊ばない（女の子に顕著）といった排他的な集い方が目立ってきたことに危惧を持ったこと。もう1つは10歳になると学童を出されてしまうこと。4、5、6年生の居場所がない、どこへ行けばいいのかということであった。そこで伴野さんは、彼女自身の子どもの時代にはどこにでもあった「路地裏遊び」を復活させようとすぎっ子くらぶを引き受けた。

伴野さんは言う、「子どもたちは大人が何かやらせなくても、自分たちでどんどん遊んでいく力があります」。だからすぎっ子くらぶは校

庭、体育館、図書館等で子ども自ら思うまま、自由に工夫して遊べるようにしている。

校庭では所々でサッカーをやったり野球をやったり、子どもたちはただひたすら走り回り泥まみれ汗まみれになっている。用具は好きに使っていいことになって

いるので、体育館ではマットを何枚も重ねた上に座ったりして大喜びをしている。

好きなように遊ばせて本当にうまくいくのかという声もあるかもしれない。しかし前述の田崎君によれば「初めてすぎっ子に来た時、あれをやらなくちやいけないというのがなくてとても楽で入りやすか



マットなどの用具を好きなように使って、いろんな遊び場所をつくる

った」という。さらに伴野さんは「確かにこれをするといったことがあるのは楽ですが、それは大人の都合か、子どもが望んだものなのか」をよく考えてみる必要があると強調していた。

伴野さん以下10〜11名のスタッフは、常に子ども視線からその子の人となりを捉えようと日々努力している。

くらぶが終了して子どもたちが帰った後に反省会が開かれるが、スタッフの間では「子どもたち」という言い方は禁止である。「○○君は」「○○ちゃん」と個人の名前で話し合う。スタッフの子ども一人ひとりに対する意識を明確にするようにしている。

伴野さんたちはこの話し合いの中から多くのことを学んでいる。例えば、1人の子が校庭、体育館、図書館と3か所ですつと悪い子ということはないという。「校庭では悪さをしたけど、体育館では仲良くやっていたね」、各持ち場のスタッフから報告をまとめていくうちに、どんな状況で、どんな性格の子と一緒に、何が起こったのか…その詳細を聞き検

証を重ねるうちに、その子の人となりがつかめていく。こうしてスタッフの子どもを見守る視野が広く深くなっていく。

見守るといっても、伴野さんは何も子どもたちに口を出さないということではない。子どもたちのヤンチャは認めるが度が過ぎたと思われること、やってはいけないと決めたことを破ることに關しては論じたり、時には叱る。

伴野さんは子ども同士のケンカを止めることはしない。しかし、複数対1人という形なら必ず1対1にさせる。「今の子は解決する力が弱いです」という伴野さん、自分から子どもに関わるときには、子どもに問題へ一人で立ち向かわせ、考えさせていくことを主眼としている。

解決力はケンカだけではない。仲間と共にやっていくことも大切だ。ある日、十数人のグループができて遊んでいた。その中の2人がうまく協調してやっていけなくなった。そのうち1人は普段から乱暴などところがあり、もう1人は体が弱く体力的についていくのが大変だった。伴野さんはここで一つアド

バイスをした。「うまくいかないのは（その2人を除いた）みんながうまくやっていないからよ!」と話した。

さてアドバイスを受けたグループはどうなったか。なんとうまく協調ができなかった2人に全体が合わせていったのである。みんなの2人に接する態度がとてもしやすく、まとまって遊んでいたのがある。

このコミュニケーション能力の発達には目を見張るものがある。しかし、まだ伴野さんたちに「あそこの仲間に入りたくないんだけど」といった訴えがある。伴野さん以下スタッフは常に意識を子どもたちの視線に集中しながら活動をしている。

全員に連帯感を培うために

長野県小布施町立栗方丘小学校

「小布施子ども教室」

観光地で有名な長野県小布施町。駅から1〜

2分のところに町役場がある。そしてその隣の栗方丘小学校に小布施子ども教室がある。

ここは登録者132名、1日平均75名が利用する。現場を取り仕切るのはコーディネーターの勝山貴代さん（34歳）。スタッフは彼女を含む5名で切り盛りしている。

小布施子ども教室の取り組みについて教育委員会の山崎博雄さんは、「子どもと一緒に地域を考えることを通して、この地のイメージを子ども達の心象に残しておきたいんです」という思いを話してくれた。さて、ここ小布施子ども教室も、校庭、体育館、



地元の神社の歴史をボランティアの方に教わる。まずは狛犬のことから

体験学習が休憩になると、数人が境内の木に駆け寄り、あっという間に木登り



子ども教室、図書館で自由に好きなように遊ばせるやり方だ。ただし図書館は校庭の隣にあるが、これは何と町の図書館なのでさすがに町民としてのルールに従う。

この子ども教室の運営の特徴は、子どもたちの連帯感を培う一助として農業体験などをはじめとした月10回ほど実施する自由参加の体験教室を活用していることである。

農業体験では野菜の苗を植えることから始める。収穫したら料理をして食べたり、売りに行ったりする。そして最後にみんなので気持ちよく食べるには、仲間と一緒に汗まみれになり、蚊に食われながら草むしりな

どをやらなければいけない…みんなとやることは楽しいことだということを実感させていく。

この体験教室活用のユニークなところは、子ども同士でふれあうことが少なくなった今、希薄になった連帯感をここで今一度意識させ、校庭や体育館で子どもが遊ぶときに、まだ馴染みの薄い子や異年齢の子との人間関係づくりの助けとして大いに役立たせようという意図で行われていることだ。

確かに、この子どもたちは校庭でも体育館でも異年齢の子たち同士がよく遊んでいる。言い換えればほとんど全員が一つの集団で遊んでいる。大抵はいくつかのグループや、同学年のグループができるものだ。

この理想的なあり方は、立ち上がりの時の勝山さんの体当たりの取り組みが基盤となっている。立ち上げの時はどこでもそうだが、小布施でも例に漏れず何でもイベントをどんどんやろうという方針があった。しかし勝山さんは一人ひとりのやりとりが大事ではないかと考えていた。

結局1年目は自由に遊ばせる方向でスタートした

が、当然というか四十数人いた子どもたちはバラバラに分かれて遊んでいた。それを一つにまとめるにはどうしたらいいのか…、考えた末勝山さんは「あたと遊ぼう」と、各グループを回って各々と遊び始めた。やがて「鬼ごっこしたいの？ あつちの子どもも鬼ごっこって言うてるから一緒にやろうか」という具合にグループ間の接着剤の役割を果たしていった。

しかし、1年目はいくらやってもまとまりは大きくなかなかつた。やがて2年目に入ると少しずつだがまとまり始めた。この様子を見ながら勝山さんにはある考えが浮かんだ。

「リーダー格の子どもが必要なのではないか」
 リーダーシップを取る子が育っていないのである。異年齢の子どもたちが集まれば、やはり上の子が何らかの形で下の子の面倒を見ていかなくてはまともまらない。勝山さんは、ある程度大きくなったグループの中でまとも役に向けていそうな上学年の子たちに、簡単な物事をそれとなく頼むことからリーダーシップの精神を育

てようと行動を始めた。

そうしていくと徐々に遊ぶかたまりが大きくなってきた。さらに連帯感を意識させ、みんなを引っ張っていく子どもを育てる方法として、前述の体験教室を活用した。体験教室では意識的に異年齢で構成する班をつくり、その班で何でも物事を進めさせるようにする。その狙いは見事に当たり、自由に遊ぶ時、異年齢の子たちの間に連帯感が強くなり助け合う行動が顕著になった。

「一人ひとりの子どもがここまで一緒になってやっていけるようになるには多くの時間が必要です」
 そう語りつつ勝山さんの目は輝いていた。

安心して遊べる 原っぱをつくりたかった

埼玉県所沢市立所沢小学校

所沢市放課後支援事業「ほっかびとんろ」

最後に紹介するのは、埼玉県所沢市の放課後支援事業「ほっかびとんろ」のスタートとなった所沢小

学校の取り組みである。

西武池袋線所沢駅西口を出て、駅前の賑やかな通りを抜け、静かな住宅街を抜けると豊かな緑に包まれた所沢小学校の門に辿り着く。向かってすぐ右手の体育館に、「ほうかごところ」のスタッフルームがある。さっそくスタッフリーダーの山田寿男さん（52歳）が迎えてくれた。

「目標は『ほうかごところ』がなくなることでですよ（笑）」。山田さんはこちらがびっくりするようなことを言う。その真意は、「子どもが原っぱのような所で安心して伸び伸び遊べないような今の時代がおかしいんですよ」ということだ。山田さんは昔どこにでもあった子どもが走り回って遊べる原っぱの再現としてほうかごところを捉えている。ここは現在769名が登録し、1日約120〜130名が利用する。スタッフは山田さんを含め12名だ。

山田さんも「子どもは遊び場を提供しておけば、好き勝手に遊んでいますよ」と言う。

実際、体育館の1階では、あちらこちらでドッジボール、ミニサッカー、ミニ野球を、子どもたちが

入り混じりながらやっている。取材当日は真夏日で館内の暑さは増しているが子どもは平気だ。体育館の2階では卓球台が数台ある。初めてやる子もいれば、慣れた子もいる。また台を使って本を読んだり、宿題をやったりしている子もいる。

校庭では3組くらいがそれぞれ校庭の角を使って野球をしている。校舎の裏手に回ると3人の男の子が土を掘って川をつくっていた。バケツから水を流しながら実に楽しそうであった。そんなやりたい放題に遊ぶ子どもたちの姿を見て山田さんは満足そうだった。しかしながら、やはり今の子は「仲間に入れて」というのが上手ではないのだそうだ。

山田さんも立ち上げの当初は、何かや



一人ひとりが遊びたいことをやり放題。
スタッフにも声を掛ける

らなくてはといつも頭に考えを巡らせていた。しかし、元校長でほうかごところ代表の粕谷喜三さんが、「子どもは勝手に遊ぶもの。その中で社会性を身につけ創造力を育むものだ」という話をされた。そしてその考えを中心に実施してうまくいった。山田さんは、「あれこれ考えたが、結局は考えなくて良かったんです(笑)。粕谷さんのおっしゃる通りだった」と当時を振り返る。

ほうかごところは所沢市で所沢小を含み7校で実施されている。今年度にさらに2校新設される予定だ。また市では、各校のほうかごこ



地べた? ならぬ床でゲーム。中味を思いつきり広げられるのが気持ちいい

ろの情報交換の場としてリーダー会議や連絡協議会などを実施して、ほうかごところの推進をしている。今後ますます広がっていくことに期待したい。

* * *

最後に、この3校を回って再確認したことは、子どもの創造力を伸ばし、人間関係力を高めるには、「子どもの自らの主体的な遊びを通じて育てるのが一番良い」ということと、「大人はできる限り支えに回ること子どもは個性を發揮できる」であった。同時に各コーディネーターの皆さんの「子どもの本当の成長には時間がかかる」という話にもうなずくところが大きかった。大人は、どうしても急かしながら子どもを従わせようとする、枠にはめようとする。子どもを信じてじっと見守る、必要なときだけそっと手を差し伸べる、こうした考え方の取り組みが、ぜひさらに全国の放課後子ども教室に広がってほしい。皆さんの地域の学校はいかがだろうか? 身近に学校があれば、ぜひちよっと覗いて、こんなことやっているとところがあるよと働きかけてみてください。